

## 紅海へのイスラエルの旅

「これらのことは、彼らに起こったことですが、それは私たちへの戒めとして記されたのです。私たちは、世の終わりの時代を生きる者たちなのです。」

コリント人への手紙第一 10:11

エジプトの初子たちが死に、イスラエルの初子たちが免れた後、ファラオはイスラエル人を去らせることを決意しました。（出エジプト記12:29-32）。波乱に満ちた過越の夜の翌朝、彼らはラメセスに集まり、神がアブラハムに約束された地、カナアンへの旅を始めました。（創世記15:18-21；出エジプト記3:8）。冒頭の聖句で、使徒パウロは、イスラエル人に起こった出来事は、私たちの学びのための「手本」、すなわち「型」として記されていると述べています。クリスチャンとして、私たちは神がこれらの古代の人々に対してなされた御業から教訓を引き出し、彼らが犯した過ちを避け、彼ら以上に神の御手による守りへの信仰を深めることができます。

イスラエル人が旅立ちの地としたラメセスは、この奴隷とされた民がファラオのために築いた「宝の都」の一つでした。（出エジプト記1:11; 12:37）。ラメセスはまた、彼らを虐げたファラオの称号でもあり、イスラエル人が約束の地カナアンへの旅を始める出発点となったこの都市にとって、これ以上ないほどふさわしい名前となっています。 エ

ジプト人は太陽を崇拝していた。彼らの太陽神は「ラー」であった。このファラオが、自ら「太陽の子」を意味する「ラムセス」という称号を名乗ったことは、驚くに値しない。しかし、真理の観点から言えば、ラムセスは実際にはエジプトにもイスラエル人にも光をもたらした者ではなかった。イスラエルの民を奴隷として苦しめ、彼らが救いを叫ぶに至らせたのは、他ならぬ彼であった。彼らの神、すなわちアブラハム、イサク、ヤコブの神は、その叫びを聞き、彼らを救い出された。出エジプト記2:23-25; 3:7-10

この点に関して、今日のクリスチャン、すなわち霊的なイスラエル人に対する神の御業との間には、興味深い対応関係がある。（ローマ8:14；ヘブル3:5,6；ペテロ第一2:5,9,10）。私たちにも、いわば、私たちが圧迫するファラオがいる。それはサタンであり、元の名はルシファー、すなわち「光の担い手」を意味する。昔のファラオと同様、彼は真の光とは程遠い存在です。それにもかかわらず、彼は様々な欺瞞の手法を用いて、「光の天使」として現れてきました。（コリント人への手紙第二 11:14）。サタンの導きのもと、神を信じる者たちは、真の神の都を装った巨大な教会組織、すなわち「宝の都」を築くように導かれてきたというのは事実です。しかし、エジプトが単に巨大な教会組織を象徴しているわけではないことに留意すべきです。それは、それらの「宝の都」がエジプト全体を構成していたわけではないのと同じです。エジプトは、より具体的には、神の霊的なイスラエルの民が皆、いつの時代にも奴隷とされてきた、この世、すなわち闇と死の王国を象徴してい

ます。ローマ人への手紙**8:21-23** ; ガラテヤ人への手紙**4:1-7**

イスラエルの奴隷たちは、自らの解放について何もできなかった。エジプトからの解放は、神によって成し遂げられたのである。また、神は、その至高の摂理と、より偉大な過越の小羊であるイエスの流された血を通して、 私たちの解放、すなわち贖いをもたらしてくださる。（ヨハネ**1:29** ; コリント人への手紙第一**5:7**） この点に関して留意すべきは、過越の小羊の血がエジプトからのイスラエルの救いをもたらしたとはいえ、それが必ずしも彼らを約束の地へと導いたわけではないということです。今日の霊的なイスラエル人についても同様です。神はイエスの血によって私たちを救い出してくださいましたが、最終的に天のカナアンに入るためには、召しの条件に対する継続的な忠実さが必要です。

過越の血によって彼らを救い出された神への継続的な信仰こそが、イスラエル人が約束の地へ最終的に入るための唯一の保証であった。過越の小羊の血をまぐわや戸口に振りかけるといふこの信仰の実践は、神によって彼らの従順の現れとみなされた。（出エジプト記**12:22,23**）。この同じ程度の信仰を継続して実践しなかったことは、神によって彼らの不従順の現れとみなされた。神は、彼らがただ塵に過ぎないという彼らの性質を覚えておられ、長い間彼らに忍耐してくださった。（詩篇**103:14** ; ローマ人への手紙第**11**章）。しかし、彼らが疑い続け、神を忘れ続けたため、神はついに彼らとの戦いをやめることになった。この信仰

と従順を継続できなかつた失敗ゆえに、神は彼らをエジプトへではなく、荒野へと引き返し、そこで死なせたのである。（民数記14:22,23）。冒頭の聖句の言葉をよく心に留めましょう。そこでは、パウロが、イスラエルに起こったことは、私たちへの戒めとして起こったのだと語っています。彼らの不信仰と不従順の例が、私たちにとっての警告となり、私たちがより忠実に歩み、召された「召命にふさわしい」者となる助けとなりますように。エペソ人への手紙4章1節

神を軽んじてはなりません。また、神が私たちのためにしてくださったことを、ありふれた平凡なこととして扱ってはなりません。かつて私たちがまだ罪の中にいた時に、イエス・キリストの流された血によって救いを与えてくださったからといって、私たちがますます深まる感謝と信仰の証しを示さなくても、神が引き続き私たちに御手を差し伸べてくださると、決して当然のこととして受け止めてはなりません。神がすでに私たちのためにしてくださったことへの感謝を示すのは、私たちの信仰と神への従順を通してなのです。使徒が「信仰がなければ、神に喜ばれることはできません」（ヘブル人への手紙11:6）と述べたとき、間違いなくこれを意味していたのです。もし私たちが、神への信仰を強め、神とその御業に対する熱意を高める手段として、神の「霊的な祝福」を用いないのであれば、神が引き続き私たちにその祝福を注ぎ続けてくださると考えるのは理にかなっていません。エペソ人への手紙1:3

## 「定住の地なし」

イスラエルの民は皆、約束の地へと出発する準備が整い、神が彼らに与えようとしておられる救いを受け入れる用意ができていました。そこで、彼らはラメセスに集まり、そこからスコトへと旅立ちました。（民数記33:5） 「スコト」という名は「仮庵」を意味し、カナンへの旅路が、エジプトでの隷属からの解放と自由をもたらす一方で、エジプトの自宅が間違いなく提供していた多くの便利さや必需品を自ら断つよう、彼らに求めていたという事実を、よく思い起こさせてくれる。

もはやイスラエル人は、家や頭上の屋根による保護を享受することはなかった。それ以来、彼らは約束の地に着くまで、天幕の中で生活しなければならなかった。ここには、安息の天のカナアン（ ）へと巡礼の旅を始めた霊的なイスラエル人への教訓がある。彼らが今まさに旅している道中の苦難から彼らを守ってくれるような「永遠の都」など存在しないのである。（ヘブル人への手紙 13:14）。 天の父の霊的な子として、約束の霊的な地へと旅を続ける私たちは、保護を物質的なものに求めません。その代わりに、私たちはそれぞれ、神が見守ってくださる一時的で質素な住まいに住み、神が決して眠ることなく、休むこともないという確信を持っています。（詩篇121:3,4）。あらゆる必要の時に与えられる神の恵みと保護という尊い約束は、そうでなければ私たちを圧倒してしまうであろう嵐や激しい試練と私たちとの間に、祝福された天蓋を張ってくれます。ヘブル人への手紙4:16

イスラエルの民は、神が備えてくださった雲の天蓋の下を旅しました。（出エジプト記13:21,22）。これは、私たちが囲まれている神の恵みの限りなきを思い起こさせると同時に、「神を愛する者、すなわち、神の御計画に従って召された者たちにとっては、すべてのことが共に働いて益となる」という事実を思い出させてくれるでしょう。（ローマ人への手紙 8:14-17,28）。この恵みは、妨げられたり、損なわれたりしてはなりません。地上の雲が、私たちと神との間に立ち入ることを許してはなりません。私たちは常に、神の恵みと愛の覆いを見上げ、それによって神の憐れみと配慮をますます深く実感できるようにしなければなりません。しかし、私たちに対する神の愛と恵みは、必ずしも人生の楽しい経験の中だけで現れるわけではないことを覚えておくべきです。主が私たちに許される試練や苦しみも、同様に神の愛の現れなのです。私たちは、「主と、その力強い御力」の中で強くなるためにも、これらの経験が必要なのです。エペソ人への手紙 6:10

例として、同じ種類の植物を二つ考えてみましょう。一つは、光や新鮮な空気が遮断された地下室で育て、もう一つは開放的な庭で育てます。数週間後、二つの植物の違いに注目してください。一方は健康で力強く、もう一方は弱々しくもろくなっているでしょう。地下室の植物は風や雨から守られていますが、まさにその保護こそが、植物が強たくたくましく成長することを妨げているのです。一方、屋外で育てられた植物は、太陽の光がもたらす栄養と、雨の活力を与える湿気の助けを借りて、自然の要素と闘いながら強くなります。こ

の広大な天の天蓋の下で、植物は、その成長と強さに寄与するあらゆる要素や要因のおかげで、力強く育つのです。

真の霊的なイスラエルの民は、キリストに成長していく過程において、神の恵みのあらゆる段階を経験します。この経験こそが、忠実なクリスチャンを真に強くするのです。木に吹きつける逆風こそが、木をますます強くし、それに応じて根を地中深く伸ばさせるのです。しかし、その木が嵐に耐える力を与え、維持と生命の不可欠な手段となるのは、やはり日光であることを忘れてはなりません。 私たちもまた、人生の嵐に立ち向かうことによって強くなりますが、死に至るまで忠実であり続けるための励ましと能力が与えられるのは、神の恵みの陽光によるのです。

イスラエルの民が荒野の旅を始めた当初の熱意は、長くは続かなかった。このことは、もし私たちが自分自身を注意深く見守らなければ（ ）、私たち自身の経験の中で何が起こり得るかを、非常に鮮明に示している。私たちの「初めの愛」を失う可能性、いや、危険さえあるのである。（黙示録2:4）。民数記33章6～8節によると、イスラエル人は当初、おおむね東へと進んでいたようですが、突然、南へ方向転換するよう命じられました。彼らにとって最も自然な選択は、東へ進み続けることだったでしょう。そうすれば、紅海の北側に流れる小さな小川にたどり着いたはずであり、そこなら確実に渡るのも容易で、彼らの目的地であるカナアンへの道筋もより直線的だったからです。

イスラエル人の進路は一貫性を欠いているように見えます。なぜなら、ファラオの支配地域との距離を広げるどころか、逆に縮めてしまっていたからです。それだけでなく、約束の地との間の障壁を高くしてしまっていたのです。しかし、この移動は神の導きによるものであったというのが説明です。聖書の記述には、「主は彼らの前を行かれ……彼らを導かれた」とあります（出エジプト記13:21）。

## 神の導きに従う

霊的なイスラエル人にとって、神が導かれる時、それは肉的な進歩の道ではなく、むしろその正反対の方向である場合がしばしばあります。それは、神の恵みと力がより大きく示されるためです。私たちは自分の道を選んではいけません。たとえその道が時に最も危険に見えとしても、常に神に私たちの進路を導いていただかなければなりません。「人の目には正しい道のように見えるが、その終わりは」私たちが望む完全な救いではない。箴言14:12

もし自分の道を選ぶことを任されれば、私たちは自然の傾向や好みに従う傾向があります。肉の道とは、通常、抵抗が最も少ない道に従うことです。しかし、そのようでは、神は栄光を受けられず、私たちの信仰も正しく示されることはありません。向こう岸が見えている間は信仰を持つのは容易ですが、霧が立ち込め、肉眼の視界を遮った時こそ、私たちは神への強い信仰を行使する必要があります。

この例えをさらに広げると、晴天の日に船で旅をしているときは、船長の技量や能力についてあまり考えないかもしれません。しかし、濃い霧が立ち込め、見慣れた目印が見えなくなったときこそ、私たちを無事に目的地へと導いてくれる船長とその能力に感謝するのです。そのような状況下では、船長に全幅の信頼を置く以外に、私たちにできることは何一つありません。不安や緊張、懸念、疑い、そして心配は、何の役にも立ちません。船長が私たちを導いてくれる間、私たちは信仰をもって待ち続けなければなりません。

これは、私たちの霊的な旅路において、まさにその通りです！ 神の摂理の中で、困難な状況から自ら抜け出す術がない時があります。そのような時、私たちにできることは、神こそが私たちを導き通してくださる方であると悟り、神に全幅の信頼を置くこと以外にはありません。（詩篇34:19、コリント人への手紙第二1:9,10）。その時こそ、私たちの窮地が神の機会となるのです。

神はイスラエルの民を窮地へと導かれたのは、彼らが「立ち止まり」、神の救いを見る機会を得るためでした。（出エジプト記14:13）。神は彼らの進路を変え、ピハヒロトへと下らせられました。そこはまさに、肉的な観点からすれば、落胆のあまり心が折れてしまうような場所でした。エジプトからの解放が完結したかと思えば、彼らは、旅を始めた当初よりも明らかに悪い状況にあるに身を置くことになった。そこで彼らは、すでに彼らのためにこれほど多くのことを成し遂げてくださった神を思い出したのだろうか。いいえ。彼らは不

平を言い、泣き叫んだ。彼らの目には、目の前の紅海と、背後のエジプト軍しか映らなかった。彼らは神に信頼を置くことを怠ったため、逃げ道など見出せなかったのである。出エジプト記14:10-12

おそらく私たちもまた、靈的なイスラエルの民として、極限の状況に追い込まれ、前にも後ろにも乗り越えられないような障害が立ちはだかっているのを見ているのかもしれませんが。主は、いわば私たちを紅海へと導かれるのかもしれませんが。ここでは、目に見える逃げ道がすべて断たれているように見えるのです。そのような時、私たちは差し迫った破滅を前にして恐れおののくのでしょうか？ そうすべきではありません。なぜなら、まさにそこが、神が私たちを救い出すための絶好の機会となる場所だからです。こうした経験を通してこそ、救いは私たち自身からではなく、神から来るものであるという、極めて必要な教訓を学ぶのです。そのような時こそ、神はかつてモーセというしもべを通してイスラエルの民に語られたように、私たちにこう言われるのです。「恐れてはならない。その場に立ち止まり、主の救いを見よ。」出エジプト記14章13節

私たちが神に委ねるならば、まさにそのような時にこそ、神は私たちの避難の塔、力の塔となってくださるのです。文字通り言えば、森の中で道に迷い、出口が分からなくなった時に、突然、見覚えのある塔が目に入り、そこへたどり着くことができれば安全が約束される、という状況ほど素晴らしいものではありません。神はまさにそのような力と救いの塔であり、私たちが最も必要としてい

る時に救いをもたらしてくださるのです。（詩篇61:1-3、箴言18:10）。神がいなければ、私たちは絶望の荒野で救いようもなく迷い続けてしまうでしょう。

この記述は、神がイスラエルの民を「ミグドルと海の間」にあるピハヒロトへと導かれたと伝えています。（出エジプト記14:2；民数記33:7）。ミグドル（Migdol）はヘブライ語で「塔」（）を意味します。これはなんと重要なことでしょうか！神がイスラエルの民に、避難の塔としてご自身を現されたのは、まさにこの場所でした。神はモーセに、その状況下で何をすべきかを命じられました。これらの指示に従ったことで、ほんの少し前まで彼らの脱出にとって最も越えがたい障壁として立ちはだかっていた海そのものを通して、救いをもたらされたのです。彼らの前を進んでいた雲は、今や陣營の後方に位置し、エジプト人にとっては闇の柱、イスラエル人にとっては光の柱となり、一晩中、エジプト人が彼らに襲いかかるのを防いだ。（出エジプト記14:19-22）。朝になると、紅海は割れ、彼らはその中を通り抜けて安全の地へとたどり着いた。

霊的なイスラエル人たちは、しばしば神によって許された経験を通し、信仰が試されることがあります。これらは私たちに、「あなたがたは恵みにより、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たものではなく、神の賜物であり、行いによるものではありません。だれも誇ることができないためです。」（エペソ人への手紙 2:8,9）。私たちが救いを得るのに、自分の力によるの

ではないということを悟ることが、何よりも重要です。時には「立ち止まり」、神の救いを見ることは、非常に必要なことです。これは、無気力な態度や無関心な態度を意味するのではなく、神に対する穏やかな確信を意味します。それは信仰から生まれる確信であり、私たちに敵対するすべての者よりも、私たちのためにいてくださる方が偉大であるという確信です。（ローマ人への手紙 8:31；ヨハネの手紙一 4:4）。このように神に信頼を置き、神が私たちの道を導かれるままに協力するとき、勝利と救いは確かなものとなります。

神を完全に信じるということは、いかなる状況においても神を信頼することを意味します。主が「立ち止まれ」と言われる時には主を信頼し、前進せよと命じられる時には信頼して従います。主が前進の命令を下された時に動かないことは、主が立ち止まるよう求められた時に動かないことと同様に、信仰の欠如を露呈することになります。しかし、主の命令に従って立ち止まるにせよ前進するにせよ、私たちの心は常に安らぎの中であってこそよいのです。なぜなら、私たちは今この瞬間も、主の成し遂げられた御業を悟ることで安息しているからです。そうして初めて、私たちはキリスト・イエスへの信仰によって備えられている安息に入ることができるのです。（ヘブル人への手紙 4:9-11）。主のために行うすべての働きと、狭い道における私たちの歩みはすべて、主とその約束に対するこの静かで信頼に満ちた安らぎに基づいており、それと調和していなければなりません。それらは、何が起ころうとも、すべてのことが私たちの益となるように働いているという確信を

与えてくれます。（ローマ人への手紙 8:28）。したがって、道の終わりと、そこで見出される安息のカナンを待ち望みながら、私たちは今この瞬間も、道の争いや困難の只中であって、「私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださる」神に感謝することができるのです。コリント人への第一の手紙 15:57